



滝沢達史、ステップス二度目の個展である。前回は画廊と事務所の空間を横断する作品を発表した。今回は「全部」。60点以上の作品を展示した。

作品群と向き合い感銘を受けたのが、全ての作品の素材と技法が異なる点にある。それは滝沢の器用さをひけらかすものではない。自由な発想を提示しているのだ。

価格も破格に安い。安いからといって質が低いのではない。むしろ美術市場の価値観を破壊に導くようなプライスである。美術作品の価値とは何か。

思えば第一次世界大戦の最中に、人間が人間を人間と思わずに大量殺戮をはじめた時期に、現代美術は発見された。しかしその頃、既に資本主義は存在した。

土方定一は、現代美術が1929年の世界恐慌で破綻したと解釈している。それは正しいと思う。何故なら現代美術は常に資本主義の後追いになってしまうからだ。

現代美術は自己も作品も権威になることを厭い、排除する。すると、無防備の状態と化す。そこにつけ込むのが資本主義で、現代美術はそれを甘受する。

現代の日本の多くのアーティストはこの罠に嵌っている。生活の基準とは体制が決めていることであり、そこに準ずることなく自らの価値を探すべきだ。

滝沢はそれをよく分かっている。それにしても「全部」とは何か。滝沢の作品全てでないことは当然で、読み方を代えれば全部何者かでも「無い」のかも知れない。

作品でもない作品。滝沢は決して資本主義にアンチを唱える訳ではあるまいが、資本主義によって消費される物品、作品、己の存在を知っている。

それに対して滝沢は、一つの装置を仕掛けた。映像が映し出されるモニターの背後に回りこむと、モニターがリュックを背負っていることに気がつく。

権威無き現代美術の作品の背後にあるのは神、君主、権力ではなく、ちっぽけな己の姿である。個人が何の力添えもなく、独りで宇宙空間に漂っている。

個の尊重から現代美術は始まる。滝沢はモニター自身となり、見る者がモニターを見るのではなく、モニターという滝沢に見られているのだ。

現代美術が「神」になってはいけないように、我々もまた権力に対する闘争を繰り返す必要があるのではないかと。滝沢の作品群を見て、私は改めてそう思ったのだ。

資本主義と馴れ合いになってはならない。かといって、勝ち負けを誘発する必要もない。この状況の中で、自分に何が出来るのかを滝沢から学ぶべきであろう。

